遠山記念館だより　第57号

青磁香炉　銘 浦千鳥（うらちどり） 龍泉窯（りゅうせんよう）
中国　南宋時代（12-13世紀）
高5.8　口径9.7　底径3.9（cm）

◇◇◇ 館蔵品紹介 ◇◇◇

遠山記念館で所蔵する「青磁香炉　銘浦千鳥」は、俗に「千鳥香炉」と呼ばれる形をした中国製の青磁香炉で、類品も複数現存している。ただしその中にあって本作は、前田家の伝来とされ、その前は堀秀政、さらにその前は明智光秀が所持していたという、歴史的な興味を引く来歴となっている。

まず本作の概要を説明したい。筒型の胴を持った香炉で、口縁部から腰にかけてややすぼまりを見せている。底部には半球状に膨らんでから下方に伸びる足が三つあるが、底部の中央に太い円柱状の高台が別にあり、こちらで自立している。このため三つの足は宙に浮いており、ここから酒に酔って足下がおぼつかない「千鳥足」をからめて、「千鳥香炉」の名前がある。胴には四本の堆線（ついせん）がめぐっており、全体を透明感のある青色に発色した釉薬が覆っている。釉薬と土は、共に宋時代の龍泉窯の特徴を示している。こうした香炉は龍泉窯で盛んに制作されて日本にも輸入され、寺院や書院の座敷飾りに用いられていた。有名なものでは徳川美術館所蔵の「青磁香炉 銘 千鳥」があり、また千利休も同種のものを所持していたことが知られる。こうした類品の中で、本作はやや胴が細く、華奢な印象となっている。

ではこの「浦千鳥」は、本当に明智光秀の所持であったのだろうか。まず光秀の人物像であるが、美濃国（岐阜県）の守護大名であった土岐（とき）氏の一族とされるものの、その前半生については謎が多く、確かなことはわかっていない。織田信長の武将として頭角を現し、元亀２年（1571）の比叡山焼き討ちの後に坂本城（滋賀県大津市）を築城し、琵琶湖西側を管轄することとなった。さらに信長軍閥では丹波、丹後方面（現在の京都府北部）の攻略を担当し、天正７年（1579）には丹波服属を成功させている。

光秀は信長の家臣の中でも高い教養を持ち、和歌や茶の湯にも造詣が深かった。茶の湯については信長の茶頭であった津田宗及に師事していたと見られ、『宗及他会記』には光秀の茶会が４会記録されている。そこで用いられている茶道具は、おおよそ次の通りである。

茶壺　銘八重桜
八角釜(信長より拝領)
平釜(信長より拝領)
筋釜
頬當風炉
牧谿椿の絵(信長より拝領)
定家色紙(淡路島かよふ千鳥……)
硯・文台(藤原定家所持)
青木肩衝(式部少輔肩衝)
大海
霜夜天目
高麗茶碗
合子の水飜(みずこぼし)(馬場紹加旧蔵)
駅鈴の蓋置

残念ながら、「浦千鳥」に該当する記録は見られないが、茶席に用いずとも座敷飾りの道具として所持していたと見てもおかしくはない。

天正10年６月１日、織田信長は中国地方で毛利家と戦っていた羽柴秀吉の後詰めに向かう途中、京都で本能寺に宿泊した。大量の名物茶道具を持参し、博多の島井宗室、公家の近衛前久などを招いて茶会を行っている。しかし翌２日の未明、先行して中国地方へ向かうはずの光秀が京都を襲い、信長と嫡男の信忠を殺害した(本能寺の変)。この情勢を察知した秀吉は即座に毛利と講和し、驚くべき速度で畿内へ戻った。この秀吉と光秀が争ったのが、山崎合戦である。秀吉に敗北した光秀は勝龍寺城(京都府長岡市)へ逃げ延びようとする際、農民に竹やりで刺されて死亡したとされる。

この時、安土城に入っていた光秀の重臣である明智秀満は、安土城を捨てて明智氏本拠の坂本城へ移動した。これを攻めたのが、信長の側近で秀吉についた堀秀政であった。この坂本城の攻防の際、秀満は光秀の持つ道具類を、秀政に渡したという伝承がある。よく知られているのは、次の『川角太閤記(かわすみたいこうき)』の記述だろう。

又殿主へ取て返し道具ども取出しあら身國行の刀吉光の脇差きたふ(虚堂(きどう))の墨跡是を夜の物に包み目録を添いかに寄手の人びとへ申候堀監物へ是を被渡よ、此道具は私ならぬ事天下の道具なれば是にてめつし候事は弥平次(秀満)傍石無人と可思召候間相渡し申候とて、殿主より下へおとし申候事[1]

文中の堀監物とは秀政の従弟で、堀家の家老となった堀直政のことである。また本作にも、次のような「由来書」が附属している。

浦千鳥香爐由来書
天正十年夏筑前守秀吉公逆臣明智光秀を山崎に撃ちて之／□を誅し急遽藩祖堀秀政公をして江洲阪本城を攻落せしむ／城の将に陥らんとする時城将明智左馬助光春簡を秀政公に通し／城中の器玩珍寶の滅亡せんことを恐れて悉く之れを舟に移して／秀政公に附属す秀政公光春の雅懐に感し主語して之を／主君秀吉公に献す其際具足櫃の中に孩児あり秀政公深く哀み／光春の心中を察して秘かに之れを他に移して生を全ふせしむと云ふ／之れ秀政公の襟度にして英傑の雅量なり
此の中に青磁香爐あり銘を浦千鳥と云ふ秀政公に賜はる斯る／由緒正しき品なれハ別に阪本浜千鳥とも称えて永く子孫に伝へて／秘襲せらるゝ什寶なり
當家傳ふる所の名物千鳥香爐ありそは東山慈照院義政公／御所持の品にて寛永六年五月美作守親長公　柳営より拝領／の品にて世に喧伝せらるゝ者とは異なり混同すへからす
聊か傳来を書して後日の証となすと云爾
弘化二乙巳陽春

一見してわかるように、坂本城から光秀の所蔵品が持ち出されたという記述が共通している。弘化２年は

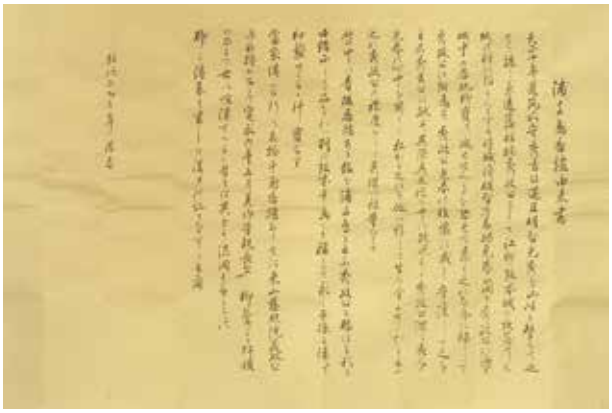


図1　附属由来書

西暦の1845年で、文中の「美作守親長公」は、寛永６年（1629）の年記から、堀美作守親良の誤記と判断される。親良は秀政の次男で、秀吉拝領の家宝を分けられていてもおかしくはない。しかしこのエピソードは、よく知られた『甫庵太閤記』にはなく、『寛政重修諸家譜』の堀秀政、直政の項にも見られない。このため史実かどうかは、疑ってみる必要がある。

例えば光秀の所持した名物茶壺「八重桜」について、『山上宗二記』は「日向（光秀）死去の時、坂本にて火に入り失い候[2]」と記している。ただし光秀が所持した道具の中で、その後も歴史に登場してくるものに「青木肩衝」がある。越前朝倉氏の重臣である青木景康の所持した茶入で[3]、後に光秀が入手したようである。この「青木肩衝」を、元和２年（1616）には徳川家康が所持しており、森忠政に下賜したことが『森家先代実録』に見えている。その後も転々として、『大正名器鑑』には旧姫路藩主家の酒井忠正の所蔵として掲載された。この「青木肩衝」が伝わったことを見れば、光秀の道具が秀吉を経て、諸方に分けられていった可能性は残ってくる。

この点で興味深いのは、名物茶壺「松花」（徳川美術館蔵）の来歴である。「松花」は信長が所持した茶壺であったが、本能寺の変に際しては安土城に残され、難を逃れた。『山上宗二記』は「一乱に堀久太郎（秀政）取り、関白様（秀吉）へ上げ候[4]」と、「浦千鳥」に似た来歴を記している。秀満が安土城から「松花」を持ち出し、直政へと渡し、秀政から秀吉に渡されたと見れば、整合性が取れることになる。

残念ながら、堀秀政は越前国北ノ庄（福井県福井市）に18万石を領したものの、自身は小田原攻めの際に病没し、直系の子孫も三代で断絶してしまう。このため堀家の史料はまとまって伝わっておらず、蔵帳も残されていない。堀氏の歴史をまとめた堀直敬『堀家の歴史』（堀家の歴史研究会、1967）には大量の文書が掲載されたが、茶道具に関する記録は含まれていなかった。同書文中で直政に渡されたとして挙げられているのが「奈良柴の肩衝」「乙御前（おとごぜ）釜」「虚堂の掛軸」であるが、いずれも光秀の所持が確認されないものばかりで、特に「楢柴肩衝」は博多の島井宗室の所持であるため、基になった史料も信用することができない。

秀政の嫡孫であった堀忠俊は、慶長15年（1610）、に御家騒動で改易されてしまう（越後福嶋騒動）。忠俊は陸奥磐城平藩（福島県いわき市）の鳥居忠政へ

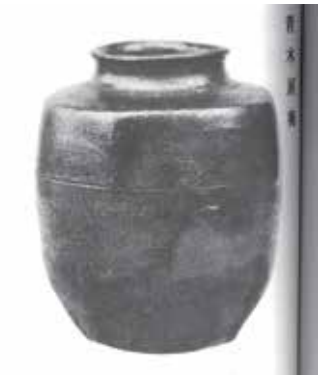


図2　青木肩衝（『大正名器鑑』より転載）

預けられ、元和７年に没し、堀家嫡流は断絶、忠俊の息子の堀季俊は加賀藩の前田光高に仕官している。一方、「浦千鳥」を所持した堀親良は、徳川秀忠に仕えて下野国烏山（栃木県那須烏山市）２万5000石を領した。その息子の親昌は信濃国飯田藩（長野県飯田市）に２万石で移封され、幕末まで所領を守っている。先述した「由来書」を信じれば、「浦千鳥」は幕末までは飯田藩堀家の家宝として伝わったと判断される。その後であるが、加賀前田家の売立目録には本作の掲載はなく、昭和13年（1938）6月21日の伊東子爵家の売立目録から本作が見つかった。来歴は前田家から、伊東家と訂正すべきだろう。また本作の箱には、「聴松荘」という旧蔵者の貼札があり、伊東家から出た後に聴松荘というコレクターが所持したと推定される。光秀所持を含め、本作の来歴究明には課題が残った形である。　（依田徹）

1　『川角太閤記　上』共同出版株式会社、1909、68頁

2　熊倉功夫校註『山上宗二記』岩波書店、2006、24頁

3　なお「青木肩衝（式部少輔肩衝）」の銘は、これまで豊臣秀吉に仕えた青木民部法印浄憲の所持に由来するとされていたが、『唐物凡数』『清玩名物記』から越前府中の青木、すなわち越前朝倉氏の重臣で府中奉行を務めた青木景康所持であったことが判明する。天正元年（1573）に信長が浅倉氏を滅ぼした後、光秀の所持となったと見て良いだろう。

4　註２前掲書、19頁

〈参考文献〉

『川角太閤記　上』共同出版株式会社、1909
高橋箒庵『大正名器鑑』大正名器鑑編纂所、1921
『寛政重修諸家譜』国民図書、1923
『茶道古典全集 ７（天王寺屋会記他会記）』淡交社、1959
堀直敬『堀家の歴史』堀家の歴史研究会、1967
「森家先代実録」『岡山県史25』岡山県、1981
二木謙一『明智軍記』新人物往来社 、1995
熊倉功夫『山上宗二記』岩波書店、2006

古筆の拡大写真が見せる仮名と料紙の様相

久保木　彰一

９月14日より開催する特別展「古筆招来（こひつしょうらい） 高野切・寸松庵色紙・石山切」では、タイトルに入れた３種の館蔵名物切の連れを館外から２点ずつ招来して、併せてご覧いただけるようにした。掛け軸に仕立てられている古筆は、もとは巻子と冊子の歌集断簡で、今回は本文が連続する部分ではない。古今集20巻1111首の大部を書写した平安時代の能書は、並外れた技と集中力の持ち主だが、書き出しから最後まで全く変わらぬ筆運び、リズムで書き上げたわけではない。高野切では、五島美術館所蔵の古今和歌集巻第一巻頭（重要文化財、歌番号１～３）、遠山記念館の断簡（歌番号９，10）、出光美術館の高野切 古今和歌集（重要文化財、歌番号46～48）の３葉の書きぶりを見比べれば、緊張感から高揚感、安定感へと筆者の心のうちが変わっていく様子がうかがえる。運筆を辿っていくと、時には筆者の呼吸が伝わってくる所にも出会えるだろう。

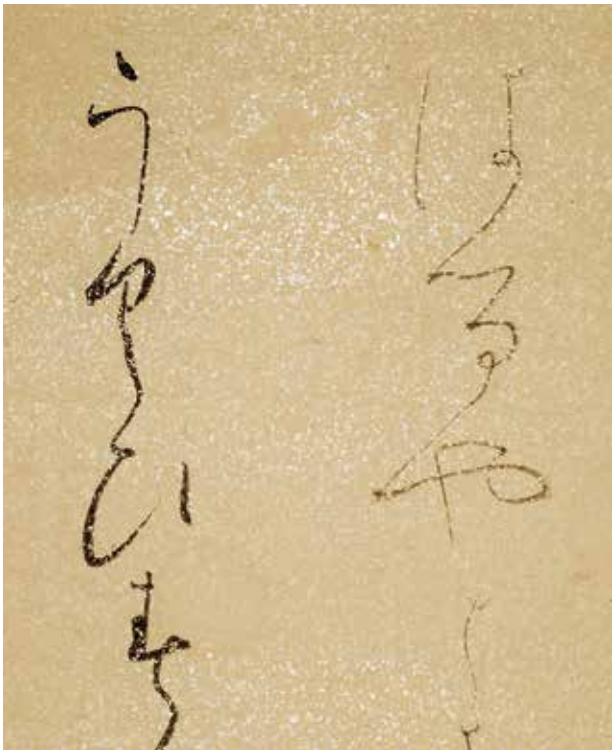
さて、展覧会図録の制作は、図版を可能な限り原寸にしたいと考えて準備を進めた。図録は展覧会後に原本を見た時の感動を思い出すための手がかり、仮名書の表現や料紙の技巧を再確認するものでもあり、縮小や拡大したサイズでは原本から遠ざかってしまう。仮名を臨書する時は先ず原寸の手本を習うのが自然であるのと同様である。

本展出品の30点のうち、借用作品６点をメインに、鎌倉時代までの館蔵古筆10点を加えて収録した。Ａ４判図録であるから25.9cmの高野切の天地は収まるが、五島美術館と出光美術館の両切の幅は41cmで、Ａ４見開きでいっぱいになる。普通の本では綴じ部分（ノド）が開きづらいので、コデックス装丁という全開のできる特別な製本を採用した。

カラー原寸図版の後に本論と作品解説を付けたが、前半の図版部分のボリュームがやや足りない。高野切、寸松庵色紙、石山切と切り替わる境に中扉を入れて簡単な古筆切の解説をし、見開き右頁には、これからの古筆本図版の部分拡大図を挿入することにした。他館の展覧会ポスターで、古筆を大きく拡大した部分が使われているのを見て、どこか違和感を覚えていた。ただし、それには肉眼ではあまり意識しなかった墨付きの状態や、料紙装飾の細部が驚くほどに開示されていたのを諒（りょう）とすることにした。

館蔵の古筆切のどこの部分を取り上げたのか、選択した理由を図録に詳しく注記するのもうるさい。そこで、拡大図版によって気付いたことや、自分では判断のつけられない疑問点なども含めて、この場で書いておくことにしたい。

最初は高野切の雲母刷（きらず）りについてである。



高野切７，８行頭部分　×1.5（図録では×3.4）

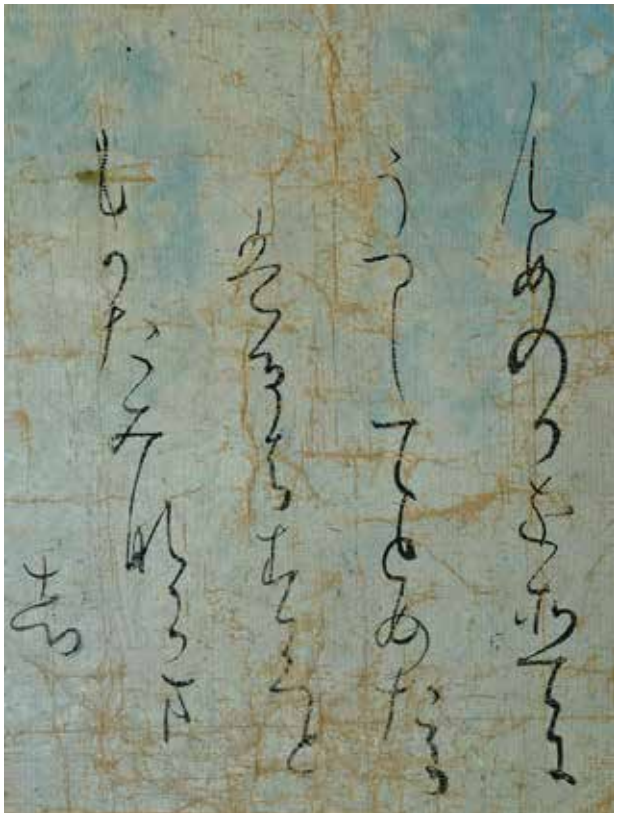
白麻紙の巻子に書写された高野切本古今集には、0.3、0.4mm大の雲母の粉末が全面に撒かれている。高野切を分担書写した第３種と同筆の手になる伊予切と、斎宮女御集を書いた小島切といういずれも11

世紀半ばから後半の古筆に、この雲母刷りが施された。高貴な趣のある装飾効果で、鎌倉時代には佐竹本三十六歌仙絵に使用がみられる。さらに下って江戸時代初期に作られた古筆手鑑の台紙に塗布したのは、余白がほのかに輝く調度性を高めるためと、切を貼り替える際に本紙を傷めずに剝すためで、雲母の薄くはがれる性質を利用したものである。

左図の「はるやとき」の２行は、かな筆線の太痩、濃淡のコントラストが鮮やかな部分（拡大すれば差も強調される）で、なぜか墨の上に雲母の砂子が載っているようにみえる。揮毫した後に加飾することは考えられないが、写真データをパソコンでさらに拡大して見ても、墨と雲母の上下関係を判断できないので、拡大スコープで確認することにした。墨の上の白点の所には墨がなく、明りを紙面に直角近くにして当てると雲母が反射する。墨がのる雲母ごと剥落してしまったらしいが、紙にはごく薄い雲母の層が残っているようである。ただし、白点でなく薄墨の点がいくつか存在し、中の一部の細かな穴から雲母の反射が感じられ、下には雲母があるらしい。薄墨であるのは、雲母の平滑面に大方の墨は弾かれたが、微量の墨が残存しているのではないだろうか。

２枚目の左上図版は、遠山記念館の寸松庵色紙である。寸松庵色紙の散らし書きの好例として競書誌の手本によく掲載される人気の１葉で、左右をトリミングし、図録ではＡ４頁に裁ち落としでいっぱいに拡大して収めた。

「むめのかを」の料紙を見ると、他の寸松庵色紙と同じように唐紙（からかみ）の状態が良くない。料紙には縦横に折れが入り、拡大鏡でのぞけば、胡粉（ごふん）が剥落した亀裂から地肌の紙繊維が見える。筆線と亀裂が交差するところは、墨線がのる胡粉ごとなくなっている。料紙の下側半分は、墨線のかすれではなく、微細な胡粉の剥落による断線がほとんどである。40年前の記録写真にある傷みと比較して、現状と変わりないことを確認している。とはいえ、筆圧、筆線の強靭さを誇る寸松庵色紙であるから、唐紙の内に滲みこむ墨の張りと艶はまだ保たれている。12.5×11.5㎝の原寸を２倍以上に拡大しても、かな書の表現力に弛緩は全く見られない。



寸松庵色紙　×0.85（図録では×2.4）

紙繊維の上に塗って層をなす具引（ぐひ）き地は紙ほど柔軟ではなく、頁の下端を摘んで開閉するたびに紙のたわみで圧力がかかり、限界を越せば縦方向か斜め方向にめくり皺、折れができたと想像できる。横方向の折れは、冊子に綴じられた状態では生じにくい。掛け軸に改装されてから繰り返される巻舒（かんじょ）によって、デリケートな唐紙に横皺が入ったと考えられる。

唐紙の危ういもろさ×跳ねるように力ある筆線、小さい料紙空間×典型となる充実の表現力、という両極性が、ほかの古筆にはない寸松庵色紙の風格と深い味わいといえる。しかし、この枯淡の美に通ずる相は、寸松庵色紙の当初の姿ではない。

平安王朝人が求めたのは、舶載の珍奇な唐（から）の紙に最先端の仮名書で和歌が書かれた華麗な調度手本で、表紙や納める箱にも装いがこらされた。枯淡の場合の、あっさりしながら味わい深い趣とは対照的なものである。

我々の眼は、４字４字１字２字５字と連綿（れんめん）書きされる仮名文字を辿っていく時に、原本の仮名の線が途切れていても、あたかもなぞり書きするように欠損を補って見ているのではなかろうか。運筆のリズムを追体験できれば、断線などは気にならない。平安

時代に、渇筆を表現のひとつと意識して書いたような古筆は見かけないだろう。

次は石山切伊勢集で、原本左側「月のうへに」の歌書き出しの部分と、右図は右側の詞書の書き出し部分で、それぞれ図録表紙、石山切中扉に使った。左右の位置は凡そこのような関係になる（次ページに全図あり）。

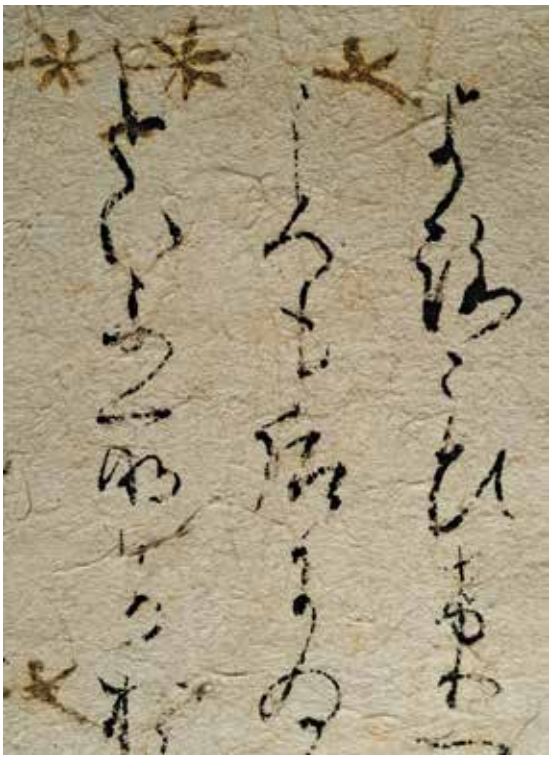
石山切伊勢集　×1.4（図録では×7.1）

歌を薄藍色の染め紙から書き始め、3字目の「う」から破り継ぎの白い紙に移る。細かい波線の接合部が右に開いて広がった所に、右図があり、写真は紙繊維の浮き上がった状態を目立たせるために、下方向からの照明で撮影している。

白い紙の仮名を追って行くと、筆線にかすれが生じて墨付きが良くないことに気付く。この白紙は、源氏物語や枕草子に「厚肥えたる」「白く清げなる」と評されて愛好された陸奥紙と考えられている。楮の繊維をよく洗ってから漉くことにより真っ白でふっくらしている上質の紙で、男性が上表や消息用、和歌の懐紙、女性は懐中の畳紙、詠草の用紙に使った。贅を尽くし美を尽くす本願寺本制作に、どうして仮名書に不向きな墨付きの悪い料紙が、部分的にとはいえ組み込まれたのか不思議でならない。『枕草子』（28段・心ゆくもの）に「白く清げなる陸奥紙に、いといと細う書くべくはあらぬ筆して、文書きたる」を、心地よいものに挙げている。白くて美しい陸奥紙に、仮名のような細い字は書けそうもないやや太めの筆を使って、男性のように詩文などを書いた時は胸がすっとする、とつづっている。陸奥紙は墨をたっぷり含んだ筆で太い文字を書くと上手くいくが、細い仮名などには向かない紙であった。それでもその白さと肌合いは素晴しいので、細字と相性の良くないことを承知であえて一部に挿入されたのではなかろうか。陸奥紙の選択は、本願寺本三十六人家集作りを企画し、制作全体をプロデュースした人物（誰か不明）の考えではなかったか。

本願寺本三十六人家集のうち貫之集下と伊勢集の2冊が、昭和4年に本願寺から売却、解体されて、茶掛けに表装された。その時点で、他の古筆切名に順って、三十六歌仙の考案者であった藤原公任を石山切伊勢集の筆者としたらしい。

もとの伊勢集は、95丁、190頁で、獅子二重丸唐草文などの唐紙が74頁、継ぎ紙が92頁（この内7丁に陸奥紙を部分使用）の変化に富んだ帖であった。前半に連なる山々と、雪積もる入江の情景を破り継ぎと描絵で表し、後半には破り継ぎによるコラージュが、様々に形を変えて登場した。



石山切伊勢集　×1.4（図録では×4.2）

原寸を超える古筆の画像は、紙面に展開する仮名の美の繊細な部分を見せるだけではない。調度手本の宿命として人の手で扱いながら開き見る行為が、墨付きや料紙に変化を与えたことも物語っている。そこには、揮毫をされてから千年近い年月を生き延びてきた伝来の歴史が、深く刻まれているのである。

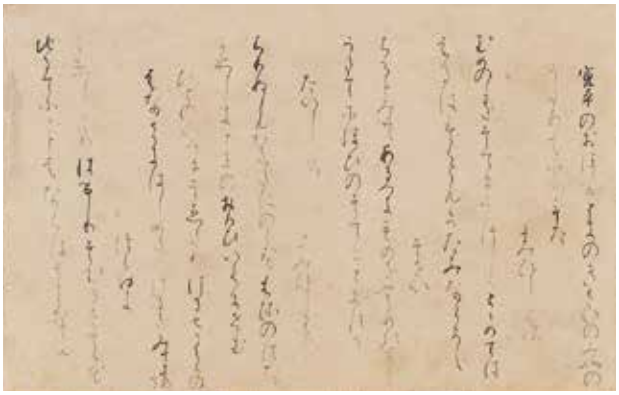
特別展

古筆招来　高野切・寸松庵色紙・石山切

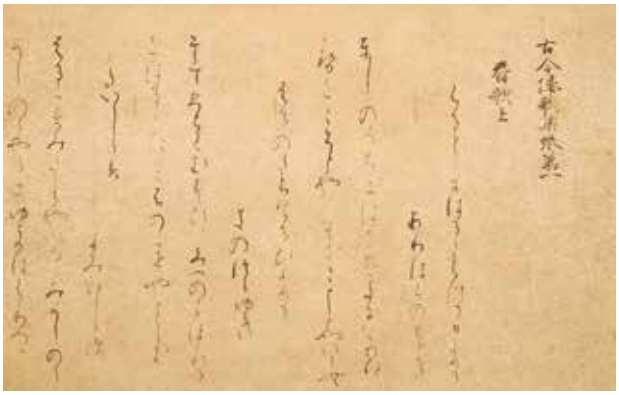
9月14日(土)～10月20日(日)

平安時代の仮名の名筆が室町時代に茶室の床飾りに使われるようになり、その後江戸時代を経て、近代の経済界の数寄者からも愛好されました。高野切、寸松庵色紙、石山切の３種の古筆はその中でも人気の高かった貴重な名筆です。本展は館外から重要文化財を含む３種の連れを招来して行う、初めての古筆展覧会になります。

平安時代を代表する仮名の名筆が16点、鎌倉時代以降の古筆や蒔絵調度など都合30点を展観します。切ごとの一瞬一瞬の煌きをご堪能ください。また、寸松庵色紙「山さとは」と石山切伊勢集「しるらめや」の２幅は個人のご所蔵で、30年ぶりの展覧会公開です。ご注目ください。



◎伝紀貫之 高野切 古今和歌集 出光美術館蔵（9月29日まで展示）



◎伝紀貫之 高野切 古今和歌集巻第一巻頭 五島美術館蔵

石山切 伊勢集 遠山記念館蔵

石山切 貫之集下 個人蔵

寸松庵色紙 個人蔵

◎寸松庵色紙 五島美術館蔵

講　演　会　**申し込み**：049-297-0007　**メール**：tkkk@e-kinenkan.com

９月22日(日)午後１:30～３:00　**会場**：事務棟地下会議室　**定員**：70名様　**参加費**：300円(別途入館料)

講師：森岡　隆 氏(筑波大学教授)『高野切・寸松庵色紙の分析と推定復元』

＊高野切と寸松庵色紙の復元巻子、冊子が特別出品されます

10月14日(月祝)午後１：30～３：00　**会場**：事務棟地下会議室

講師：久保木　彰一(当館副館長)『茶掛けとしての古筆の誕生』

記 念 茶 会　**申し込み**：049-297-0007　**メール**：tkkk@e-kinenkan.com

10月13日(日)　受付開始９月１日　各回とも20名様

午前11：00～(第１席)　午前11：40～(第２席)　午後１：00～(第３席)

午後１：40～(第４席)　午後２：20～(第５席)　午後３：00～(第６席)

席主：依田　徹(当館学芸課長)

会場：遠山邸中棟２階　数寄屋座敷　**席料**：1,000円(別途入館料)

ヨーロッパの美しい意匠 ― 服飾を中心に ―

11月2日(土)～12月15日(日)

1 イブニングドレス

祭礼用司教服(フランス 18世紀　写真２)からマリア・モチガ・ガレンガのイブニングドレス(イタリア 1920年代　写真１)まで、18世紀から20世紀にかけてのヨーロッパの服飾を中心に展観いたします。華やかな織り、精緻な刺繍、美麗なレースなど、それぞれの時代を代表する服飾技術の粋をお楽しみください。

フランドルのタペストリー(16世紀末　写真３)やドームのテーブルランプ(フランス 1920年代　写真４)などの工芸品、また、アメリカの婚礼衣装(19－20世紀)も展示いたします。

2 祭礼用司教服

3 タペストリー 部分

4 テーブルランプ

雛の世界

2020年2月8日(土)～3月15日(日)

江戸時代に開花した人形文化は、日本独自の雛人形を母体として、多種多様な人形を生み出してきました。本展では、雛人形を中心に江戸時代中期から昭和時代中期頃までの様々な種類の人形を展示し、日本の人形の歴史をたどっていきます。享保雛、次郎左衛門雛、古今雛、高さが2～3cm程の「芥子雛」、また近代の名工と呼ばれる作家たちの雛人形の他、嵯峨人形、御所人形、衣裳人形、賀茂人形、からくり人形、抱き人形、絹糸細工などを展示いたします。

併せて会期中、遠山邸の大広間では、十畳の座敷いっぱいに飾られた雛壇飾りもご覧いただけます。これらは当館の創立者である遠山元一が、長女貞子の初節句の祝いとして、大正時代に揃えたものです。日本の人形が持つ魅力をご堪能ください。

享保雛(江戸時代中期－後期)

遠山家雛壇飾り 御殿飾り 部分(大正時代)

絹糸細工 犬(明治時代)

●親子で楽しむワークショップ＆ギャラリートーク

ー投扇興遊びとおひな様のお話ー

共催　川島町教育委員会「地域子ども教室」

　せんすを投げて的にあてる、昔のゲーム「投扇興遊び」にチャレンジしてみませんか。またその後は、遠山邸に飾られた遠山家のひなだん飾りの前で、おひな様にまつわる色々なお話をしながら、作品の見学をしていきます。

日時：2020年2月9日（日）　午前10：00～12：00

会場：事務棟地下会議室・遠山邸

参加費：不要

参加対象：小学生（入場無料）と保護者です。
お子様だけの参加も可能です。

お申込み：電話もしくはメールで1月8日（水）より予約を受付けます。
TEL 049－297－0007　　メール arai@e-kinenkan.com

雛の世界　投扇興体験お楽しみプラン

　担当学芸員による「雛の世界」展の解説と投扇興体験をセットにしたプログラムです。
投扇興は、普段は公開されていない遠山邸中棟２階の数寄屋座敷を使って行います。また床の間には特別に雛人形を飾ります。

日時：2020年２月23日（日）（当日は午後1：30に美術館ロビーに集合してください。）

会場：美術館・遠山邸中棟２階

定員：20名様

参加費：300円（別途入館料）

お申込み：電話もしくはメールで１月８日（水）より予約を受付けます。
TEL 049－297－0007　　メール arai@e-kinenkan.com

遠山邸 中棟 2階数寄屋座敷

投扇興体験（遠山邸中棟1階での様子）

「雛祭りの日」ガイドツアー

日時：2020年2月29日（土）・3月1日（日）・3月3日（火）午後1：30～

会場：美術館・遠山邸　（当日は午後1：30に美術館ロビーに集合してください）

参加費：入館料のみ

　担当学芸員が「雛の世界」展と「遠山邸」を解説します。（所要時間は、約1時間30分です）

これからの催し物

遠山邸2階 特別公開日

日時：9月28日（土）・10月26日（土）・11月16日（土）
午前11：00～午後3：00

遠山邸2階の和洋折衷の洋間応接室、寝室、及び12畳間座敷の特別公開を、上記の日程で行います。まだ、ご覧になっていない方は、是非ご参加ください。

アールデコの照明具や、オパールガラスが作り出す昭和モダンのデザインと、伝統和風建築の意匠が違和感なく融合されていて、上品で独特の雰囲気が感じられます。2度目、3度目の方も、気付かなかった新しい発見があるかもしれません。

●レトロな空間で、ノスタルジックな音楽を
手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会　Part 25

日時：11月3日（日）　午後1：30～2：30
会場：遠山邸大広間　**定員**：50名（先着順）　**参加費**：入館料のみ

和風建築の技術の粋を集めて昭和初期に建てられた、遠山邸の大広間で、SPレコードの鑑賞会　Part25を行います。SPレコードは、かつて音楽を記録する唯一のメディアとして一世を風靡しましたが、やがてLPレコードの出現によって姿を消しました。しかしながら、SPレコードでしか聴くことのできない演奏があります。貴重な記録の中から、クラシック曲や童謡・唱歌などを聴く予定です。電気を一切使わず再生されるノスタルジックな音をお楽しみください。なお、ご自宅に、SPレコードをお持ちの方は、当日お持ち頂ければ、飛び入り再生も受付けます。

2018年度 催事報告

2018年	4月14日	土曜講座「日本美術館史上の遠山記念館」
	5月 4日	手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会
	5月 6日	端午の節句茶会
	10月20日・21日	淡交社主催茶会（遠山記念館で濃茶席を担当）
	11月 3日	手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会
	11月 4日	遠山邸をもっと楽しむ会（遠山邸の重要文化財指定を記念し、川島町と共催）
2019年	2月 9日	地域子ども教室（小見野っ子くらぶ）
	2月10日	地域子ども教室（三保谷っ子くらぶ）
	2月23日	ガイドツアー　琳派の日
	2月24日	特別講演会「遠山記念館の琳派作品」
	3月 2日	ガイドツアー　雛の日
	3月 3日	雛祭りの茶会

投扇興を楽しむ会　毎月1回開催　計12回開催

旧遠山家住宅重要文化財指定記念シンポジウムの報告

平成30年（2018）8月17日、遠山邸が国指定の重要文化財となったことを記念して、建築研究者の先生方を講師にお招きして、建築のシンポジウムを開催しました。

令和の新時代になる直前の本年4月28日(日)、会場を遠山記念館から出て川越駅に近いウエスタ川越の多目的ホールにおいて行いました。定員200人を予定のところが開演前には満席となったため、次々に椅子を追加して、総勢330人もの方々に参加聴講をしていただきました。

遠山公一当館理事長の挨拶の後、旧遠山家住宅の建築調査を行った小出祐子氏が「近代和風建築の精華―旧遠山家住宅とはー」と題し、多彩な建築的な特徴と魅力を講演されました。続いて、矢ヶ崎善太郎氏は、「遠山邸に見る近代数寄屋の意匠と大工の技」について、縁(えん)を縮小化した西棟座敷の意匠や、見えないところに発揮される大工の技を紹介してくださいました。

また、西洋美術史の大家で大原美術館館長である高階秀爾氏の「文化財建造物保存･活用の歴史と理念」の講演では、文化財建築は現状を保存すると同時にその活用を考えていかなければならないと提言されました。パリのノートルダム大聖堂の火災があって程ない時期だけに、参加者も真剣に講演を聞かれていました。

最後に、建築調査委員長を務めていただいた宗本順三氏の司会で討議に入り、遠山邸の近代建築ならではの明るさと庭と一体になっている形式、文化財建築の歴史的な価値を大切にしながら保存し活用していくことの重要性、また２階建ての中棟について耐震対策を検討する必要があるとの意見がだされました。会場から大きな拍手をいただいて、閉会いたしました。ご参加のみなさま、ありがとうございました。

「遠山記念館 友の会」入会のご案内

「遠山記念館 友の会」は、遠山記念館を何度も訪れたいという方や、邸宅・庭園および美術館の活動やイベントに積極的に参加したいという方のための集まりです。皆様のご入会を待ちしております。

会員特典
1．会員証の提示により、同伴者１名様まで一年間何度でも無料でご入館いただけます。
2．展覧会やイベントなどを掲載した「遠山記念館だより」をご送付いたします。
3．次の有料イベントへのご参加が無料となります。
- 建築の専門家による講演会「遠山邸研究会」
- 当館コレクションについて外部研究者にお話をいただく「講演会」
- 当館学芸員の研究テーマをわかりやすく解説する「土曜講座」
- その他、各種イベント

4．当館主催のお茶会(雛祭りの茶会、端午の節句茶会等)の席料が半額となります。
5．当館の出版物、ミュージアムグッズを２割引でお求めいただけます。

年会費：3,000円　**有効期間**：入会月より１年

申し込み方法

同封の払込取扱票（赤い用紙）に、住所・氏名・電話番号をご記入の上、年会費3,000円の払い込みをお願い致します。

ご入金の確認後、追って会員証を送付いたします。会費の領収は会員証の送付を以て代えさせていただきます。ご利用の有無に拘らず、会費の払い戻しはいたしません。

送り先：〒350-0128　埼玉県比企郡川島町白井沼675　　公益財団法人 遠山記念館　　担当　松村
TEL 049-297-0007　FAX 049-297-6951

2018年度　新収蔵品

昨年度、つぎの作品及びコレクション等のご寄贈をいただきました。
心より感謝申し上げ、ご紹介いたします。

①遠山 元道 様（東京都港区）

伝橋本雅邦「鐘馗図」

伝河鍋暁斎「立雛図」

他、掛幅２点、漆器３点、小袖1領
（遠山元一の三男である遠山直道の旧蔵）

②石井 荘男 様（埼玉県さいたま市）

木地玩具「大将馬乗り」山形県

木地玩具「鯛車」鹿児島県

木地玩具等　合計157点

利　用　案　内

◇入　館　料

期　間	一　般	学　生
特別展	1,000円	700円
通　常	700円	500円
美術館休館時	500円	300円

※中学生以下は無料、団体20名以上は2割引きとなります。

◇開　　館　午前10:00～午後4:30
（入館は午後4：00まで）

◇休　館　日　月曜日（祝日の場合は開館、翌火曜日休館）

12月21日（土）～2020年1月6日（月）
2月 7日（金）、3月17日（火）

◇美術館のみ休館：展示替えのため

9月 3日（火）～ 9月13日（金）
10月22日（火）～11月 1日（金）
12月17日（火）～12月20日（金）
2020年 1月 7日（火）～ 2月 6日（木）
3月18日（水）～ 3月31日（火）

◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。

URL http://www.e-kinenkan.com

電車・バスでのご来館の場合
- 東武東上線・JR埼京線　川越駅
- 西武新宿線　本川越駅　●JR高崎線　桶川駅
  いずれも「川越駅－桶川駅」間の東武バスで
  牛ケ谷戸（うしがやと）下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合
- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより　第57号
2019年８月 発行
編集発行　公益財団法人 遠山記念館
編集担当　井上　則子

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675
TEL 049-297-0007
FAX 049-297-6951